ISSN 0286-1968

河上肇記念会報

NO. 32

1988-12-20

一億年八十を過ぎ
未学問

聚題

目次

河上肇先生の思い出 …… 増田　孝 (1)
『全集』以後内 …… 杉原　四郎 (4)
一九八八年度総会特集Ⅰ …… (8)
河上博士をどうみればよいか
―即席〝討論〟会から― …… (10)
出席者一言集 …… (17)
西垣邦夫先生の
ご逝去をいたんで …… 木村　和輔 (28)

河上肇先生の思い出

増田　孝

旅ごろも　はらいもあえぬわれながら
　　またあらたなる　旅にたつかな

一、この歌は、河上博士の大正十三年頃の作でありますが、先生の波乱万丈、疾風怒涛ともいうべきご生涯をよく表現された歌だと思います。

先生は、学問においても思想においても、また、人生の生き方においても、真剣に真理（まこと）を追及して、血のにじむような苦心をなめられた学者でありました。その姿は、あたかも、のみをもって岩石を打ち砕き、その中から宝石を探し求める鉱夫の姿にも似ておりました。そして、宝石を発見したと信じたときには、その信ずるところに勇往邁進されたのが先生です。

一、河上先生は自らを旅人にたとえておられます。学問に、思想に、また人生問題において転機を経験される時、古い旅衣をさっぱりと脱ぎ捨て、更に新しい旅衣を着て、新しい旅に立ち出づる人の如くでありました。若き日にエゴイズムを捨て、無我愛を体得するために伊藤証信の無我苑に飛び込んだり、やがてまたそこを出て京都帝国大学の教師となり、学問的には資本主義経済学の真理を極め、更に永い間の研究を経てマルクス主義経済学者として一世を風靡し、その数多い著述は洛陽の紙価を高めたのであります。

昭和三年には、先生の奉ずる学問や思想の故に大学を追放され、実践運動に入り、弾圧を受け、検挙され、遂に五年間の牢獄生活を送るのやむなきに至りました。そして、昭和二十年、いたく健康をむしばまれておられた先生は、病のために波乱の生涯を閉じられたのであります。

そのように先生は、幾度が新しい旅衣を着替えて、人

生の新しい旅を次々に馳せられたのです。昭和七年作の

たどりつき、ふりかえりみれば山川を
越えては越えて　きつるものかな

の法然院内の歌碑に刻まれたこの歌も、自らの生涯を顧みての感慨であろうかと思います。

一、私は、昭和三年、先生が辞職されるに当たり、学生に向かって語られた最後の記念講演を今も忘れることができません。先生は静かな口調で淳々と説き去り、説き来り、満堂の聴衆を魅了されました。そして最後に「私は自分の信ずる真理を守り通したいと思う。大学を辞職してその椅子を失ったが、諸君より餞別の記念として送られたこの椅子に座って、自分の書斎において今後も学究生活を生涯続けて行くことにしたい。」と講演を結んで演壇を降りられましたが、その姿が今も目にあります。

一、私は、大学の正門に近い、吉田二本松にある先生のお宅の前の道を通って、よく散歩しながら熊野神社の通りに出ていましたが、先生は時折、夫人と共に、あの禅僧にも似た、痩躯鶴の如き和服姿で散歩しておられました。そして、その後ろに先生を尾行している、私服の警官の姿をよく見かけたものです。その時代の険しさを表わす一つの縮図でもありました。

一、やがて、私は在学中大患に見舞われて、故郷に病を養う身となりました。魂は荒涼とした暗い森の中をさ迷った末、光の如き園の中に入り来たりました。そして、私は河上先生を通して信じたマルクスの世界から、内村鑑三先生を通してキリストの世界へと目を開かれ、百八十度の大転機を経験することになったのです。河上先生の学問に深い感謝と敬慕を捧げながらも、私はマルクスと唯物史観の世界を捨て去って、キリスト信仰の世界に入ったのです。故に、それ以来私は、河上先生の世界とは別の世界に住むことになりましたが、それはともかく、河上先生の卓越した学問や思想、人格に触れることが出来たのはこの上ない幸いに思っております。

一、先生は、マルクス学者としてその生涯を閉じられたのでありますが、しかし、先生の著書の序言の一節に次の言葉を読んで、私は興味深く思いました。それは「私は明治三十一年の秋から明治三十五年の夏まで東京帝国大学の学生であったが、この期間に私は初めてバイブル（聖書）を繙き、そこに説かれてある絶対的な無我主義とでもいうべきものに、ひどく心を打たれた。それ以来、利己主義と利他主義の問題がいつも心を占領していた。

明治三十八年の十二月に私が一切の職を投げうって、当時『無我愛』を唱道されていた伊藤証信氏の無我苑に飛び込んだのは、かかる年来の問題を根本的に解決せんがためであった。」というものでした。

また、先生が「大阪朝日」新聞に掲載された「貧乏物語」の中で、「社会主義も駄目。社会政策も駄目ともなれば、残るものはもっと根本的な方法か。それは人心の改造である。この方が社会組織の改造よりも根本である。即ち、人間教育によって人間を道徳化し、利己的人間を改めて、利他的人間とすること、これが社会問題を解決する方法である。」と言っておられます。

そして、名著、「資本主義経済学の史的発展」という書物の巻末において、人道主義経済学のジョン・ラスキンに大きな関心と興味を寄せておられるのです。

しかし、経済学者としての先生は「人心」よりも「組織」の変革を志して生涯を終えられました。私は、私自身マルクスの世界からキリストの世界へ、「資本論」の世界から「聖書」の世界へと人生の大転換を遂げましたので、この点から言えば、私は先生の忠実な弟子というわけにはまいりませんが、しかし、優れたヒューマニストであられた先生は、やさしい眼なざしを私に向けて、多分、偉大なるフローレンス人の格言を引用して、仰言るでしょう。「『汝の道を歩め、そして人々をしてその言う委せよ。』私（先生のこと）はこの言葉に励まされつつ、尚、私自身の道を進むであろう。あなたは、あなたの道を行くがよい。」と…。

（折尾女子経済短期大学長）

『全集』以後 (六)

杉原四郎

一

河上荘吾氏から、同じ岩国市におすまいの栗林家に所蔵されている河上肇の書簡二通のコピーがおくられてきたので紹介する。栗林家は、河上肇の祖父才一郎の実家である。才一郎のことは、河上の「祖父河上才一郎」(『全集』続5所収)にくわしいが、才一郎は栗林源次郎の次男で、三四才のとき河上家の養子となった。河上はその中で、栗林の家は河上の家の北西にあたる川西という辺鄙な所にあったこと、また「私は幼年の頃、祖母などに連れられて、度々その家へ行ったことがあり、後年京都へ一家を構へるやうになってからも、帰省の度毎に大概は欠かさず訪問してゐる」と書いている。

全集所収の一九三八・三九(昭和一三・一四)年頃の河上の書簡から、その頃栗林家と河上との間に交通があったことがわかるが、栗林家あての河上の書簡は全集に一通も入っていない。それが今度はじめて二通出てきたわけである。

拝啓致し候。平素は御無沙汰にのみ打過ぎ失礼の段御海容被下度候。扨て承り申候へば、先般御父上様には御病気御養生御叶い不被遊遂に御逝去被遊候由、皆々様御愁傷の御程乍遥御察申上候。乍延引御悔申上度、一筆如此に御座候。　敬具

(明治)四十一年八月十七日　　河上肇拝

栗林源蔵様

「御父上様」というのは才一郎の兄浅之允の嫡男友生。源蔵はその子で当時の栗林家の当主である。その頃河上はまだ東京に住んでいた。

もう一通はその栗林源蔵の病歿に際しての遺族にあてた書簡である。

拝啓承り候へば、御主人様御事過日来御病気にゐらせられ候処、御養生相叶はさせられず、遂に御永眠被遊候由、只今郷里よりの通知に接し、誠に驚き申候。皆々様の御なげき限り無き御事と拝察、茲に謹而御悔申上候。

御生前には国許の者共常々御高誼を厚く致し、且つ老生も度々御親書頂き居り、そのうち帰郷の折は親しく拝眉の上種々の御物語拝承致度と存居候ひし所、今は空しき望と相成り、残念至極に奉存候。

先は不取敢御弔詞申上度如斯御座候　　敬具

昭和十四年十月三十日　　河上肇

栗林源蔵様

御遺族様御中

この手紙と同じ日づけで河上右京に出した河上のはがきが全集に収められていて、その中に「只今不取敢弔詞差出おき候」とあるが、それがこの手紙である。このときも河上は東京（中　区永川町）にいた。

なお書簡の読み方について一海知義氏の御教示を得たところがあった。

二

最近私は河上肇に関するつぎの二つの文章を発表した。

「河上肇と大正デモクラシー」、『世界と議会』（尾崎行雄記念財団）、一九八七年四月号。

「内容見本の書誌的意義――河上肇の場合を中心に―」『書誌索引展望』（日本索引家協会）、第12巻第1号、一九八八年二月。

月刊誌『世界と議会』では、最近大正デモクラシー期に活躍した思想家の評伝をシリーズでとりあげており、その一つとして河上論を書くことを依頼された。「大正デモクラシーの時代は、マルクスとともにミルが大いに読まれた時代、いいかえれば自由主義と社会主義が共存していた時代であった。そして河上もこの時代のオピニオン・リーダーの一人として、この二人の思想家から多くのものを吸収しつつ、評論活動を活潑に展開したのである。」これがこの一文の結論である。

河上肇は尾崎行雄をどのように考えていたか。それをうかがう資料はほとんどないが、獄中で書いた「感想録」の一九三四（昭和九）年十月七日の欄外につぎのように書かれているのが目にとまった。

「十月六日付の絵葉書、一週間後に入手、石井柏亭の『号堂先生像』と題するもの也。七十年の政戦を経た号堂先生がまるでおしろいを附けて坐ってゐるやうで、パ

ックはまた田舎芝居の書割そのまゝである。こんなものを平気で同じ会場に安井氏のT先生の像と並べて居る者は芸術家ではないね」（『全集』22）。

同じ主旨のことは同年10月21日づけの河上たづあての手紙の中の左京あてのところにもあるが、石井柏亭の作品に対するはげしい不満の気持の表白のなかに、尾崎行雄に対する河上の敬愛の気持がにじんでいるように思われる。

内容見本論で私は、河上肇に関する五つの内容見本――二つは河上の生前に、三つは戦後に出た――を紹介した。二つとは、一九二七（昭和二）年に上野書店から出た河上・大山共編『マルクス主義講座』の内容見本と、一九二八（昭和三）年に刊行予定だった五社連盟版『マルクス全集』の内容見本である。河上がこの二つに書いている文章は、ともに全集16に収録されているが、河上の文章のみならず、この内容見本全体が、河上研究にとってのみならず、日本マルクス主義史にとっても大きな資料的価値をもっていることを、私は説明した。

戦後の三つは、河上肇著作集（筑摩書房）、『社会問題研究』復刻版（社会思想社）、河上肇全集（岩波書店）の刊行的に出た内容見本である。これらのパンフレットには、刊行の主旨、刊行物全体の紹介、諸家の推薦のことばなど、読みごたえのある情報が盛られているが、この種のものを所蔵する図書館はわが国になく、つい散逸してしまい勝ちなのが残念である。なお私は、『研究』復刻版の内容見本に「社会科学論争史の記念碑」という一文を寄せており、また『全集』第一期刊行時の内容見本の「刊行にあたって」（編集委員会）の作成に参加した。

三

今春東京大学出版会から出た "Enlightenment and beyond, political economy comes to Japan" という論文集は、西欧の経済学が幕末にわが国に渡来して以後明治末にいたるまでの間に、どのように紹介され普及したか、とりわけ専門学校や大学でそれがどのように講義されたか、またそれが官僚の政策やジャーナリストの評論の中でどう生かされたか、つまりわが国における経済学の制度化の歴史をたどったものである。

私はその中の数章を執筆しており、河上肇については、「ジャーナリズムの経済学者」の章で彼が主筆だった『日本経済新誌』を紹介するとともに、「商業の中心大阪の商業学校と法学校」の章の終りで京都帝国大学に設

立された法科大学での経済学の講義の模様をのべたところで河上肇に言及し、河上はその頃京大で講義したのみならず、同志社や関西大学にも出講していたことをのべた。そして当時の京大の経済学関係のスタッフが東大の出身にもかかわらず、協力して東大の学風とはちがう京大独自の経済学をうちたてようと努力したこと、そして彼らが一九一五（大正四）年に『経済論叢』を創刊するにいたったことは、経済学における「京都帝大のアカデミックな独立のあきらかな指標である」と書いた。

田島錦治、戸田海市、神戸正雄、小川郷太郎、そして河上肇、河田嗣郎らが京大の経済学をになう人々であるが、その中で戸田海市はその学識と指導力でグループの中核となり、幅広い活動をしている。戸田の業績やその頃の京大経済学の研究と教育については、京大経済学部の調査資料室の手で着々と資料的解明が進められているが、最近こうした調査結果をふまえつつ、明治末期から大正にかけての「京都経済学」の特色を分析した研究があらわれた。松野尾裕氏（立教大学）のつぎの二つの論稿である。

「明治末期の戸田海市と『京都経済学』――『国民経済』論の比較史的研究のための一試論」立教経済学研究四一巻二号　一九八七年。

「国民経済論の思想史的比較に関する覚え書――ドイツと日本における学的集団の形成を手掛かりとして」同四二巻二号　一九八八年。

松野尾氏は、田島をはじめとする京大のスタッフが東大の金井延らの学統をうけ、彼を中心とする社会政策学会のメンバーでありながら、当時の東大には見られぬ清新で豊かな学問的営為を京都の地で展開した事情を詳細にあとずけている。その分析は当然戸田海市を主軸としてなされているが、河上は戸田に招かれて京大のスタッフに加わったものであり、戸田の影響を強くうけながらそこで理論と歴史の研究を進めたのだから、松野尾氏の論文に河上も重要人物の一人として登場するのは自然である。氏の河上論の新しさは、河上をこのグループの集団的活動の中でとりあげていること、またこのグループの経済学の特質と意義を、ドイツの社会政策学会における新しい動向との関連でとらえようとしていることである。今後の一層の展開が期待される。

一九八八年度 総会特集 I

恒例の総会が、秋晴れの十月十六日、法然院にて開催されました。院主のご都合で、法要が一時間ずれ、総会は定刻通り、世話人代表杉原先生の挨拶と参加者の自己紹介ではじまりました（本号「一言集」として掲載）。法要と墓参をすませ、和田先生のご講演（次号掲載予定）をいただきました。当日、ご講演に関連する資料として、毎日新聞編集委員の小嶋さんがまとめてくださった「河上博士をどうみればよいか」（本号掲載）が配布された。

いつもの進々堂のパンと般若湯が山下さんより頂き、両角さんの収穫されたリンゴがとどき、総会を潤しました。ご両氏に深謝。

総会に出席された曽我さんより事務局によせられたお便りをここに載せさせていただきます。

今年の河上忌には、進々堂のあんぱんを三包も頂戴して、うれしがって戻りました。パンを余分に買うということは参会者がすくないという意味にもなり、ややさみしい思いもせぬでもありませんが、あまり賑やかでない方が好きでもあり、誰方かが言われたようには格別若者をお愛想して呼ぶこともいらぬとも考えます。河上忌は、河上肇というよき人を敬慕し、しのぶ会ということで私には充分に思われます。

今年は和田教授のお話も面白くうかがいました。批判というのはややオーバーで、良き上にも良きを望まれる和田さんの、河上肇への敬慕の情はよくわかりますから一層よろしいでした。完璧の人間などこの世に在りようもなくムジュンに満ちた、相克に満ちた博士をこそ、私は尊敬しているのだからと思いつつ帰りました。

どんな大学者であられても、河上肇が机辺の人のみで

ある限り市井人にはあまり関わりがない、世の賢き人々の目には、いささかドン・キホーテ的とも映るだろうあのいろいろの行動が添うからこそ私には「よき人」河上肇なのですから。

曽過には見せて貰えぬご本堂で仏様を拝し、よい声のお経にもたんのうし、おいしいお膳まで頂戴して、おみやげも貰って、よいお話を聞いて、四千円とはなんともつたいないことかといつも思ひつつ戻ります。

ひたすら純粋でひたすら直情であられた、そして博士のそれらを最もよく理解されていた河上夫人のことなども。

お世話くださった方々にもお礼申しあげます。

曽我まり

事務局皆様

河上博士をどうみればよいか

――即席〝討論〟会から――

ある会合が散会したあと、和田洋一・同志社大学名誉教授が、大門英太郎・河上肇記念会世話人（千代田鋼事相談役）をつかまえ、「君にひとつ聞きたいことがあるんだ」と切り出した。和田さんと大門さんは三高の同窓、したがって「オイ、お前の仲」である。

「聞きたいこととは、河上肇博士を、どう思っているかだ。いま、河上先生をどう評価しているかだ」

このテーマは、ちょっと立ち話でお互いが納得できるものではない。そこで、ホテルのラウンジに席を移し、始まったのが、以下の「議論」。たまたま居合わせた西川治郎・東本製粉相談役（キリスト者で和田先生の教え子、大阪府日中友好協会監事）、宝木武則・反核産業人会議代表（エスペランティスト）も「議論」に加わった。四人とも戦前、天皇制政府の弾圧で獄にあり、何らかの形で河上肇博士とつながりがあった。

このテーマは、河上会会員にも関心のあるところであろう。ということから「河上博士を、こうみる」の即席論議を収録することにした。＝敬称略

（小嶋康生・毎日新聞編集委員）

和田　河上会のなかには河上先生を崇拝しておられる方もいるが、大門さん、あんたはどうなのか。

大門　河上先生には親しく仕え、いまでも尊敬している。しかし、先生にも欠陥はある。完全な人とは思っていないよ。

和田　ボクも先生を身近な存在と感じている。家が近くであったから散歩中の先生によく会った。ボクはペコリ、おじぎをして散歩途中の先生のそばを通ったものだ。法経大教室で講義も熱心に聞いた。

その河上先生は一体、経済学者だったのか、思想家、哲学者だったのか、運動家だったのか。

西川　求道者ですね。一般に、そういわれており、そこに魅力があるのでないか。

大門　求道者やね。経済学者として先生はマルクス主義の体系を日本に持ち込んだ。しかし、何か新しいものを付け加え、マルクス主義を発展させたとはいえない。

和田　マルクスは没後百十年後の日本のことは知ってはいない。そのマルクス主義を先生は全く疑問の余地なしとされたのであろうか。

大門　マルクスは日本を知らない。しかし資本主義がどういう社会を作るかを知っていた。

和田　先生はマルクス主義を完結したものと理解されたのであろうか。

小嶋　先生をとりまいた時代環境、とくに天皇制支配との緊張した対決、これ抜きには語れますまい。

大門　当時はコミンテルンの方針は絶対であった。異論を挟む余地はなかった。それに我々は包囲されていた。

和田　実践家としての先生の評価はどうなのか・・・。先生が政治の場に出られたのは、教え子たちが陸続、実践活動に入り、獄につながれていく。じっとしておれなかったからであろう。

大門　いや、先生が運動に入られたのはマルクス主義、いやレーニン主義の理論と実践の統一を身をもってなされた。

和田　先生に迷いはなかったのか。

大門　当時、日本共産党は三つのスローガンを掲げた。当時の表現でいえば支那、中国への侵略をやめろ、農民に土地を与えよ、天皇制打倒、この三つのスローガンはすべてを言いつくしていた。先生のお考えも当時、それにつきたのでないか。

和田　キリスト者も本当は、天皇制打倒をいわねばいかなかった。それができなかった。

大門　封建的支配体制のもとではキリスト者はヨソ者として排除の対象となっていた。古く遡れば天草四郎から、ずっとだ、江戸時代の儒者が、孔子が軍勢を率いて上陸してきたら、どうするかが議論になったが、キリスト者も同じ踏み絵をふまされた。

西川　当時の経験を通していえば、教会は教会の存立を守るため妥協していった。敬けんなクリスチャンも組織を守ることを優先させた。

小嶋　そういう逆流うず巻く中へ、先生は飛び込まれた。自叙伝などをみると、実践のため上京される前はイライラしておられる。迷いをふっきるのに懸命だったお

姿が浮かぶ。

大門　先生が実践活動に入られたのは山宣暗殺が大きな契機になった。和田君の話を続けば、山本宣治も求道者であった。

西川　山宣は死後、党員の称号を与えられたのですな。

大門　河上さんは大感激して入党された。たどりつき、のあの有名な歌が示している。しかし、当時の党がスパイのため虫くい状態であったなどツユ知らずだ。先生にとっては輝ける存在であった。

小嶋　和田先生は靖国訴訟で頑張っておられる。中曽根政治との対決の最前線におられる。闘いにコミットされていかれる中で、悩みもおありであろう。それで河上先生の迷いの問題を出されたと理解する。

大門　なるほど。和田君は、その点偉い。

西川　和田先生にとって河上博士の問題点は何なんですか。

和田　先生は社会科学者だったハズ。その先生がマルクスが七十年も前に書いたことをそのまま金科玉条とされた。マルクスはアジアのことはろくに知ってはいない。そのマルクスが、こう言った、ああ言った、その説明だけでは学者とはいえないと思う、信仰的に受け入れておられた。

人間的な親しみはあるし、尊敬はしているが、先生はマルキシズムを自分の頭で考えておられない。そこが残念なんだ。だからいちから十まで賛めない。

大門　私どもも、いちから十まで賛めてはいない。そう思っているとすれば、和田君の偏見だ。

先生は学者である、しかし、マルキシズムは実践を求める。その理論に忠実に政治の世界に入っていかれた。

学問の世界で、先生はマルクスの築いた理論のうえに、どれほどのものを積み上げたかとなると疑問なしとはしない。わが国で第一等の経済学者であったが、新しいものは多く産まなかった。

小嶋　当時はマルキシズムで世の中が十二分に説明できた。何かをつけ加えたとすれば、当時の政治風土の中では修正主義となり戦線に悪影響を及ぼしたのではなかろうか。先生の頭の中に発展的構想が仮にあったとしても、その芽は敵味方双方から枯らされたであろう。

和田　昭和の始めは階級闘争が、いわばキーワードであった。ところが今日、階級とか階級闘争とは、ほとんどだれもがいわない。

マルクスがクラッセン・カンプといったから河上先生

がいう、河上先生が階級闘争をいうからインテリ、学生がいう。インテリ、学生だけが幼稚だったのか。

大門　世の中の変化はある。それは河上先生の責任ではない。戦後、中産階級がふくれたことは事実だ。労働者が中産階級化した。しかし、階級がなくなったわけではない。

西川　資本の性格が、サラリーの余剰を蓄積していくものである以上、階級の目でみないと経済界は理解できない。マルクス経済学の基礎は、そこにあり、現実の世の中、人間の歴史は階級抜きで語れない。

和田　マルクスやエンゲルスは階級闘争に力を入れすぎ、民族の解放闘争、宗派と宗派との争い、男女戦などを軽視しすぎたこと、労資間の中間層軽視も不満だった。

大門　河上さんもブチブルだ。しかし、一途な人なので書斎を捨てて労働者の中に入ってこられた。共産党入党は〝労働者宣言〟なんだ。文筆活動されている事の方が、より労働者階級のために役立つのだという議論は当時からあったが、先生の選択は別であった。

西川　人間の生き方を大事にされた。自分を救うためには、身を投げ出すことを知っておられた。それが労働者階級のため、ひいては人類のためという判断につながっていた。

あの方の教育の基礎に儒教があり、志士的な生き方をめざされた。

大門　そうだ。吉田松陰の影響だ。

西川　その意味で愛国的であった。ただし、天皇制に関してはコミンテルンの指導があった。中国の場合も同じだが、先ずコミンテルン方針ありきなのだ。求道者・河上は、与えられた方針に忠実であらんと努力された。

和田　ところで日本共産党は今日、階級ということを言っていないのではないか。

西川　階級という言葉をいわなくても階級社会であるとみている。

和田　階級をふりかざして選挙演説しても票にならん。演説会場に集まっている労働者も中産階級の顔をしているんだ。

大門　失うのは鉄鎖だけといっていた時代と違い、車もクーラーもカラーテレビももっている。それは事実だが、労働者は労働者だ。

西川　階級という言葉を使わなくても階級社会は厳存している。階級の無い社会は理想で、共産主義社会になれば階級がなくなるとする仮説がある。しかし、そのた

めにはキリスト教でいう愛の精神が中心になる生き方に人間一人ひとりがならねばならない。

大門　なるほど。

西川　いまの社会主義社会は残念ながら階級社会だ。一党支配というのは、それを証明しているようなものだ。

小嶋　和田先生ご指摘の階級ですが、資本主義に変容があるとすれば、河上先生の労作に時代的制約があってもムリからぬことかと思う。

西川　マルクス経済学を直訳した階級論、中間階級論はいわなくなったが、それはマルクスが百年以上も前に資本論を書いた時代の資本主義と今日とを比べれば資本の動きは変わってきている。私の友人で九州大学の経済学部にいた高木暢哉、『信用制度と信用学説』の労作のある学者で生涯を資本論の研究に明け暮れた。彼によると、資本論の中の貨幣に関する部分が、当時は経済の中心であった。貨幣で回る資本の運動が景気、不景気、恐慌を生み、戦争に突入していった。今日では信用制度が厚くなり、資本の性格、内容がすっかりかわってしまっている。資本主義も、その結果、長引いている。

内田穣吉先生は一九二九年型恐慌の接近をいわれているが、どうも違う。とくに恐慌、そして、戦争という図式にはならない。それは資本が国境を越えて進出していっているためだ。工場や合弁をもっている相手国と戦争とはならないのだ。資本の利害関係も複雑になっている。

宝木　時代の変化は大きい。それにマルクス主義といっても例えばスターリンに都合のいいマルクスの文献だけが公表されていた。最近になってマルクスの新しい資料が続々でてきている。これまで都合が悪いと押さえて、それでマルクスが歪められた面もあったのだ。

大門　和田君のいうように階級闘争はいわなくなった。しかし、社会の構造が変わったわけではない。額にアセして物を作っている人と、その上前をはねてマネーゲームにうつつを抜かしている人が厳にあるんだから。

物を作ること、労働すること、これが第一なんだ。それなくしてマネーゲームもないんだから。

西川　戦後、日本共産党が伸びたのは高度成長のなかで、議会政党として伸びた。失うものは鉄鎖のみのプロレタリアートの集まりではなくなった。これでは日本の資本主義を根本的に変革することはできないのでないか。だが、半面、日本共産党は世界の共産党の中では、主義に最も忠実な党で、他国の党のいいなりにならない。見上げたものだと、最近になって思っている。

とかく私が下獄したころは河上先生の時期とあまり変わっていないのだが、その頃、（コミンテルン方針など）批判する能力もなかったし、ただ、こうすることが世の中をよくする事だ、その一点であった。世俗的な出世など考えもしなかった。河上先生も次元は違っても同じ心情ではなかったかと思う。和田先生も同じ時代の空気を吸って感じておられる。

宝木　私は河上先生の本をじっくり読む前に実践に飛び出した。最初にやられたのが昭和八年だった。血気があり、正義感がある者はじっとしておれなかった。だれかが、そそのかしたというものではない。

和田　西川君は学生のリーダーで、これはえらい奴だった。

西川　いや、とっぱな事ばかりでした。しかし、最初はキリスト教が、あるていどブレーキとなった。

和田　段々とキリスト者を軽蔑するようになる。ボク自身が、そうだった。

大門　宗教は神道や仏教も含め、やはり阿片なんだ。

西川　宗教は、もともと個人の心の問題なんだが、教会という社会の組織となると別。私らが大事に思っていた教会も戦時中には〝聖戦〟を叫び出したし、代表が中国の戦線まで出かけ、教会組織を維持しようとした。戦勝祈願もやり出す、こうなると阿片といわれても仕方なかった。

しかし、私らの運動仲間には不降身・不辱志の〝英雄〟もいた。その君は軍医となることを拒否、長い営倉生活の末、一兵卒として中支で死んだ。

大門　それは今日でもバチカンに破門されても中南米でがんばっている「解放の神学」一派もあるしネ。

西川　中南米では「解放の神学」があって人びとを駆りたてているのではなく、人民の苦しみがあり、教職者は目をそむける事ができなくなっている。そして、教職者は苦しむ信者とともに立ち上がっている。バチカンはアメリカのご機嫌を伺って対応しようとしている。カソリックの歴史は常にそうであった。

和田　私は八十歳を越してから、いろいろと考えるようになった。それまで、あまり考えずに年をとってきた。この歳になってから、いろいろ考え、そして河上先生の事も気になる。だから大門さんにお尋ねしたわけだ。

西川　河上先生像も時代で変化して当然であり、見直しがあってもおかしくはない。

大門　河上先生の時代、ソ連はわが祖国であり、スタ

ーリン批判など及びもつかなかった。当時、アンドレ・ジイドの『ソ連紀行』は、けしからんと思った。しかし、今にして思えばジイドの目は確かであった。

西川　私は戦後、日中友好運動をやってきた。そのため毛沢東盲従主義のレッテルを張られたが、いまにして思えば、その批判は正しかった。にも拘らず「日中」をやることが正しいと思ってやった。

宝木　岩井筆次さんは私の親類だが、あのお医者さんも純粋な人だったから、今のお話通り、揖得抜きの主張を死ぬまで繰り返された。

西川　晩年は、そのためうとじられ不遇だった。

宝木　時代の制約は大きい。戦前の共産党は、ある意味で宗教的であった。河上先生も同じで共鳴盤がなった。

和田　河上先生は政治の事は不案内であったが、大衆運動は、この党で、という信念は学問の裏付けがあった。

大門　ありのままの河上先生を評価すればいいのだ。繰り返すが河上先生とて絶対ではない。先生自身、一番よく承知しておられた。それぞれの目で、先生をみてもらえば、そして学んでもらえればいいのだ。これが結論だナ。

（一九八八年八月二四日）

河上肇記念会'88総会

――出席者一言集――

大門英太郎・世話人あいさつ　来年は河上肇生誕百十年となります。生誕百年の年には盛大に行事を行いましたが、来年も記念の催しを企画しようではないかと考えております。そこで杉原四郎先生を中心に案をねっており、東京河上会とも相談をしているところです。具体化しましたらご報告を申しあげますが、その切はよろしく、ご協力をお願いします。

杉原四郎世話人代表あいさつ　本日は京都国体が始まり、京都の街はにぎやかになっていますが、法然院はいつもと同じ静かさです。今年も、その静かな中で一日皆様とご一緒に、河上肇を偲びたいと思います。

そこで、私の方からは三つの事を申し上げ、挨拶にかえたいと思います。

第一は、大門さんが先に申しましたように来年は河上生誕百十年です。最近は、河上が生きていたら、どう考えていたであろうかと思うことが多々ある時勢です。それだけに何か、我々の会でも来年は若干の行事をやり、河上を偲ぶよすがにしたい、と世話人の方でいろいろ案を練っております。

百年の時や没後四〇年の時にやりました講演会や資料展示。あるいは百年の時に作りました河上を知る小冊子、その新版を出したらどうかとか、世話人が知恵を出しあっております。皆様の方でもこの機会に、こういうのをやれば、というご意見がございましたら、ぜひ、ご教示願いたい。

二番目に申し上げるのは、河上の書いたものの中で一番、広く読まれている自叙伝のことです。自叙伝は河上が亡くなって間もなく世界評論社から出され、いまでは岩波文庫などいろいろの版がでています。しかし、それ

ら自叙伝には版本の上で問題がありました。

それをできるだけ完全なものにしたいというのが全集を作った時の宿題でした。そして全集第二期の続五、六、七の三巻で新しい版本の自叙伝を作りました。しかし、全集は予約者だけに配布されており、多くの方の手には届かない。

そこで岩波では単行本でも出す計画を進めておりまして、来年早々にも全三巻で出ることが決まりました。すぐ文庫本にしてもらえばいいのですが、文庫本は現代かなづかいというプリンシプルがあり、旧かなづかいの自叙伝を入れるわけにはいかないようです。ともかく河上が晩年、心血を注いだ自叙伝が、生誕百十年にあたって、より改善された形で読まれるとなるわけです。（注）

三番目は、その自叙伝を読んで、河上とその時代からどういう教訓をえるのかということです。自叙伝のハイライトは昭和三年に京大をやめてから数年間の歩みであります。資本論研究をやりたかったが、それができず、彼が一番不得手と思う政治の世界に入り込んでいく。五年には上京、労農党結成に献身するが、やがて大山郁夫と袂をわかち共産党に入党、地下活動に入って、検挙される。自叙伝では克明に、その歩みを書いている。

それは河上にとって一生のターニングポイントであったわけですが、時代の転換期でもあった。そのころ昭和大恐慌があり、政府は治安維持法を改悪して共産党弾圧に本腰を入れだす。世界の動きをみても恐慌からファシズムへと向かっている。その時期にマルクス主義者の歩んだ道を自叙伝は克明に書いており、いろいろ考えさせられる。

労働か実践か。志士として松陰から受けついだ情熱、それに時代的背景、それらがせめぎあいながら彼の道を規定したと思う。いま、それを読んでどういう教訓を得るかが大切ですが、そのため、その歩みを間近にみた人々の意見や感想を知ることは参考となる。

今日、和田さんのお話をいただくのも、そのためです。和田さんは京都で学生時代を過ごされ、暗い谷間の時代に京都で展開された、例えば『土曜日』とか『世界文化』など、日本におけるフロンバクレール（人民戦線）の運動にも参加された。キリスト者として、良心的研究者のリーダーの一人として活躍されてこられた。その和田さんから河上について率直なお話を聞くのは、我々に参考になると思っています。

注、杉原代表世話人は東京河上会へのお便りの中で、

『自叙伝』を読む場合、そこに何が書いてあるかと同時に、何が書いてないかを見てゆくことも興味があります」と記されている。

佐田季男氏（枚方市）　八年前に有斐閣にいる友人に誘われて入会、それ以来、毎年欠かさず出席させて頂いています。総会に参りますと、大先輩の方がたから有益なお話をいつも聞かしてもらっており、それが楽しみなんです。

林辰彦氏（八幡市）　京大十八年卒、学徒出陣のため半年繰り上げ組です。大学では高田保馬が河上先生のあと経済原論を講義していた。直接、河上先生の教えは受けなかったが図書館で先生の書を読み、心酔した。中国・河北交通などを経て読売新聞に入り、政経部記者、論説室を歩き、定年後は宇都宮徳馬先生のもとでアラブを勉強。いまは大学講師やフリーライターの仕事をしています。

上村明・千代氏　脳梗塞で倒れ、その上、耳も遠いといった有り様です。これが河上会出席の最後になってしまうかも知れないと思い、むりやり女房を引っぱってきた。河上さんの墓に参り、進歩的な皆様のお話を聞いていると精進の気持ちとなる。

私が大学を出たのは昭和三年だが、当時、このような会合を持つと川端署や松原署に引っぱられたものだ。刑事につきまとわれなくてもすむ、ありがたい時代である。しかし、それでは階級制度がなくなったかというとそうでもないし、天皇制の鼻息が、まだ残っている。まだ、大門君らも昔の理想を進めてもらわねばならない。大門君は、もう引退したいといった口ぶりだが、私も力をふりしぼるから君もがんばってくれ。

麻生泰一・正子氏　福岡からやって参りました。毎年、この席で大変、いい話を伺い喜んでおります。これからも（妻も）一緒に参ることにしておりますので、今後ともよろしく願います。

両角康則氏　長野県から夜行でやってきました。私は百姓で一町足らずのリンゴで生計をたてています。河上先生とは書籍の上で親しくなったわけですが、一番、感じ入ったのはNHKのテレビ評伝、ここに真っとうな先

生がおいでだ、と感心した次第。それから河上会に参加させてもらっています。

今年は陽気（気象）の方がおかしく、リンゴや稲作も大変な時なんですが、なにはともあれ法然院だけはいかしてくれと、うちの女しよ（女房）にお願いして出てきました。

（事務局から、今年も立派なリンゴをお届けしていただきました。）

曽我まりさん（神戸市） 娘のころから河上先生の生き方に子供なりの感銘を受け、それが、この歳まで続いています。ヒマだけはたっぷりできてきたので、これまで読めなかった先生の本もボツボツ読んでいくつもりです。段々、世の中がいやな方向に向かっている感じを受けております。若い人たちに負けずにがんばらないと思っている、このごろです。

小田正夫氏（堺市） 昭和七年生まれですから、ここでは若輩です。河上先生に関心を持つようになりましたのは、京都で経済を学んでおりました弟を通じてです。先生の生きざまを学んでいきたいと考えています。

山田一美氏（大阪市） 二十六年生まれです。総会は昨年に続き二度目です。河上先生との出会いは本を通じてです。世界の経済の動きは厳しくなりつつあるだけに、河上先生の書をひもどき、その中から将来の展望をさぐっていたい。これからも河上先生のことを学んでいくつもりです。

中島邦蔵氏 かねて河上会に出席したいと思いながら機会に恵まれず、今回が初めてです。河上先生のお姿を遠くからお会いしたのは昭和四年でした。佐賀高生だった私は総選挙の応援に来られた先生の講説を佐賀市公会堂に聞きにいったときです。それから昭和八年、大学で学生運動をやり、中野警察に逮捕された。先生が逮捕、留置されたところだった。私が入った時、先生はタライ回しで中野署にはおられなかったが、看守が、河上先生は立派な人だ、といっていた。

その後、満鉄に入り、上海事務所詰めとなったが、その時、鈴木重歳君と一緒だった。戦後、西日本新聞にいたが、一九六〇年、第二回世界ジャーナリスト会議のため訪中、北京で周恩来招宴を受けた。その席で鈴木君と出会い、旧交をあたためた。

現在、名古屋経済大（犬山）におり、折りに触れ、河上先生の波乱万丈の人生を説いている。「先生は真実を求める心で一貫していた、君らも見習わねばいかん」と。それというのも昭和二年以来、私が河上先生を尊敬し続けているからである。

北原　邁氏　先ほど信州弁が聞こえてきましたが、私も信州からきました。色川（幸太郎）君は、今日、まだ来ていないようだが、彼とは高校同級だった。彼は東大へいってしまったが、私は川端署に随分、厄介になったものです。

河上先生には教室で原論と（経済）学史をおききしたが、丁度、そのころ先生をやっつける若いのが出てきた。ということもあり先生のところは活気に満ちていた。

先生を、どうみるかはむずかしい。一人の人間として矛盾が多かったが、まさしくなま身の人間であるが故であった。そこが今日でも先生が生きている大きな要素でないかと思う。もちろん、マルキシズムを説かれたのであるが、押し進めていくと先生の人格、人間的なところに最後はひかれていった気がいたします。

井田綱子氏　父（北原氏）につき添って今年も出席させて頂きました。河上会の雰囲気も素敵です。若いころから囲りの影響もあって河上先生のご本を手にすることもあり、立派な方と感心していました。最近では一海（知義）先生の河上先生に関する本を読まして頂き感動しております。

山崎宗太郎氏　河上先生に直接、教えを受けたものではないが、先生とおつきあいのあった方々を通じて身近に感じてきた。大内兵衛、柳田民蔵、笠信太郎それに高橋正雄先生らで大阪の大原社研でご昵懇になっていたから自然と河上先生のことを伺う機会が多かった。また、著書を通じて啓発を受けた。一番、感銘したのは先生の終始一貫、真理を探究する求道者の態度であります。

河上会は同志社の住谷悦治先生のご紹介で入会したが、その先生もついに逝かれ、寂しい限りです。年一回、この静寂の地、いわば浄域で開かれる河上会に出席することを楽しみになっています。大門さん、お世話は大変でしょうが、今後とも続けていってもらいたい。

稲田素臣氏（京都）　開業医でしたが昨年やめました。

父も開業医で河上家に出入りをしていた関係から入会しました。

私も学生運動でクビになり、新たに静岡の学校へ行くことにした。昭和四年一月四日のことです。静岡に向かうため京都から汽車に乗ったが、京都駅のホームは人だかりで、何事かと見れば河上先生が三等車の乗降口に立ち、（演説を）しゃべっておられた。先生、上京の日で、ここで有名な赤旗事件がおこり、警察が赤旗をとろうとする、とられまいと支持者たちが逃るという立ち回りがあった。思い出に残るシーンであった。

先生の評価はさまざまだが、私には魅力ある方であった。真面目で、真理をとことん追求される、その姿勢に多くの方が感心されるが、私もそう思う。いまなお、河上先生を偲ぶのと先生に少しでも近づきたいと思うからであります。

長谷川俊雄氏（大阪）　河上会には、十五、六年、毎回出席させてもらっています。先生との出会いは昭和のはじめ、山口県人である学校友達が「先生に保証人の判をもらうのでついて来い」と申すので京都のお宅に伺ったことからです。それから先生のご本を読むようになった。その後、住谷先生に直接、教えを受けたこともあり、住谷先生を通じ河上先生を一段と尊敬するようになった。年一回、先輩諸氏のお話を伺い、またユニークな会の雰囲気にひたることができて幸いに思っています。

野下貞雄氏　長谷川先生の目が少しお悪いので私がお供にきました。それでも、もう三回目の出席です。席上、河上先生のお話をいろいろ伺うにつけて、これから先生のことを勉強していきたいと考えています。正式の会員として今後は出席させてもらうつもりですので、よろしく。

一海知義氏（神戸）　ＰＲをさせてもらい自己紹介に代えます。京都には河上肇音読会というのがあります。月一回集まり、現在は『自叙伝』を一時間、輪読、そのあと毎回、講師の話をきくのです。この音読会を手がけられた塩田庄兵衛さん（元立命館大学教授）から、ぜひＰＲを、といわれてきたわけです。

私は、この音読会の講師に今年、二回もあてられた。そこで河上博士のご家族のことをお話した。今日も先生のお嬢さまやお孫さんがおみえでありますが、私は家族

研究の専門家ではありません。ただ、『河上肇獄中往復書簡集』上下を私の編で、岩波から出しました。その獄中書簡のほとんどは河上さんからご家族に出され、また、ご家族から河上さんに出されたものです。その書簡を一番、こまめに読んでおるだろうから家族の事に通じているということになったようです。

もう一つのテーマは河上先生の漢詩で、その話をすることにしています。音読会のことも、よろしくお願いしたい、ということであいさつにかえます。

古池信一氏　但馬の城崎からきました。去年暮れ、法然院で河上先生のお墓にお参りしたさい、河上会を知りました。そして、今回初めて参加しました。先生の印象は好人物ということ。厳しく真理の追及のため歩んでこられたが、美しい人生だったと思います。これからも毎年、元気である限り参加させてもらうつまりです。

広岡正次氏（大阪）　古書店を経営していますが、とくに明治から戦前にかけての油絵を中心に扱っています。河上先生との出会いは大阪の弁護士浜口先生のお推めによるもので、自叙伝を読んでから一辺倒になってしまった。河上先生と津田青楓の所は扱わないことにしている。私には河上先生が鏡。その鏡をみていると、曲がる心を直していただける。本会に出席すると、この鏡が磨かれ、さらにきれいになっていく。

村上俊男氏　学生時代から先生のご本を読み尊敬している。とりわけ五十才を過ぎてから日本共産党に入党され、捕まることがわかっていて地下活動に入っていかれる、そのお姿に感服した。河上会に入会したのは弁護士の菅原昌人先生のところへ出入りしておりましたさい、「入れよ」とおっしゃったためです。毎回、諸先生方のお話に感銘を受けているが、ただ、会場に若い人の姿が少ない、どうしてであろうと、残念に思っている次第です。

小泉鈔次氏（京都）　昭和三年か四年、河上先生が労農党の演説会で立たれたお姿、それから東京で勉強した先生の著作、それらが私の身体にこすりついており、いまだ先生をお慕い申し上げております。

佐伯千仞氏　元は教師で今は弁護士をしています。昭

和二年、京大に入りましたが、当時、高校ではつぶされていた社会科学研究会は京大では健在でして、大学の寮寄舎、今の楽友会館の隣にあったんですが、その入り口に学生集会場があり、そこで研究会をやっていました。研究会には河上、末川、恒藤といった先生方がおいでになり、学生と一緒になってやっておられた。研究会は満杯だったが、私も同席させてもらった。

そのころ河上学説に対し批判が強くなっており、福本和夫さんの福本イズムで先生は包囲されていた。研究会でクリテカル（批判的）なのが多くなっていたが、ある席上で、河上先生は福本さんの本を手にして、「浅薄かくの如き本が俊秀な諸君ごとき学徒を捕えるのは残念」とつぶやかれていたのが強く印象に残っています。

小沢善雄氏　近畿大学で財政学を教えております。陽明学の佐藤勝巳先生のご紹介でやってきました。若い世代の育成に力を込めておられる佐藤先生のもとで陽明塾を育てていきたいと思っています。

河上先生は著作を通じ学んでおりますが、足尾銅山事件にさいしてとられた義の心を評価しております。実は母校の早大の雄弁会も足尾鉱毒の事件を特に意気に燃えて作られたものです。

河上先生は智・行・信の人といえましょう。学者として、教育者として、社会運動家として、それぞれの側面を学んでいきたいと思っております。隣は教え子の学生・師玉憲治郎君です。

佐藤武義氏（京都）　音読会はいつも参加してますが、河上会の方は始めてで、沖本彰さんのお誘いできました。

河上先生の影響力の大きさを最近、感じています。先年、古書店で貧乏物語を入手しましたが、表紙の裏に書き込みがあり、「昭和二十年八月三日、駆逐艦・楢　西村少尉から贈呈さる」とありました。私は、びっくりした。将校が大切に手許に置いていたものを、部下か友人に手渡したと推察できる。それが敗戦の直前なのです。

また、数年前、朝比奈隆氏が読売新聞の「青春記行」という欄に、徴兵逃れができたのは河上先生のおかげと書いていた。徴兵検査のさい丙種にされた、不審に思うと、軍の検査官がいうには、君は京大で河上肇に教えを受けたであろう、そんなものは兵隊にいらん、と。先生の影響力の大きさを示すエピソードを紹介しました。

私は、いま全集を読み続けているが、一つ不満のある

のは婦人問題が書かれているのが少ないことです。日本資本主義を考えると労働者の婦人が一番、搾取を受けていたことが明らかであるからです。『自叙伝』の中でも秀夫人の記述が少ない。奥さんの記述が、もっとあれば人間・河上がもっと理解できたであろう。

私はスタンダールの小説が好きだったが、彼は自分の小説は千人に一回読まれるより、一人に千回読んでもらいたい、と書いているが、河上先生のご本は千人に千回読まれる、そういう本だと思っている。いま統一労組懇の事務局にいますが、仕事を進めるうえでも先生の教えから得るところは数多いのです。

葉抱武三郎氏　私は河上先生のヒューマンな姿にひかれ、この会に出席しております。大学は慶応でしたが、俗にいうノンポリで、軍隊や戦争も嫌いだが、さりとて日本が負けるのも望まない中途はんぱに過ごしてきた。徴兵されたが幹部候補生になることも求めず最後まで兵隊であった。そのうち参謀本部直轄でロシア語通訳委員にされたが、そこへ集まってきたのは学生運動経験者が多かった。その軍隊の中で河上先生のことを口にするのがいた。そういう人たちの何人かは戦後、共産党に入り活躍した。その一人は占領時代、進駐軍が電車の中で乱暴するのをみて「それがアメリカの民主主義か」といって抵抗をした。そういう友人から河上先生を知り、先生の本を読んできた。そして、ヒューマンな生き方を学んだ。先生はヒューマンということにつきると思っています。

山田新三郎氏　大門英太郎の弟です。私は昭和三年、京都大学経済学部に入学しましたが、志望の理由は、無試験ということもあったが、やはり河上先生の講義が聞きたかったからでありました。だが、その年、先生は京大を追放されたため講義はきけなかった。そこで、先生のお宅に数回、参上して、お話を伺った、何を話したかもう、思い出せないが、甘いものが大好きだった先生だけに、上等のお菓子がいただけるのも魅力だった。いま思い出しても穏やかな、そして親切な先生であった。

先生が労農党のため上京されることになった時、楽友会館に、五十人が集まり、先生の送別会兼激励会をやった。これは記録に残ってないようだ。この壮行会のあと、先生の家まで列を組んでお送りした。その時、私は末川博先生と一緒に歩いたことを記憶している。当時のこと

は「京都帝国大学学生運動史」（昭和堂）に詳しく記されてある。その当時、学生運動をやった連中が白川会を作り、旧交を温めていた。段々、みんな出不精となり、このところ会合が開かれないのは残念だが、やはり年月を感じるこのごろである。

大橋満子氏　大橋隆憲の妻です。夫は来年で七回忌を迎えます。生前、大橋は河上先生の事で一生懸命でした。その気持を汲んで、河上会と音読会に入らせてもらっています。

この機会にお伺いをいたしたいことがあります。先生のお墓には梅の木があるのはご承知の通りです。塩田庄兵衛先生が東京に帰られるさい、その梅の木の世話を頼まれ、梅干し係りも作っているんですが、ちゃんと和尚さんの許可も得てのことなんでしょうか。その点が気になっています。

この質問に梶田法然院住職から「河上家の梅でございますので、ご自由になさってください」とのお答えがある。

上野忠人氏　サラリーマンをやりながら奈良県の信貴山の麓の小さな町の町会議員をしております。マルクスや河上先生の望んでおられた搾取のない世の中を一日も早く築くため微力ながら頑張っています。

河上先生というと高い山の頂きをみている感じだったのです。ところが、この会に参加してから身近な存在となり、皆さん方と一緒に頂上めざして歩いている、そんな実体感をもつようになっております。

熊木秀雄氏　京都中央郵便局に勤めています。学生時代、立命館大学の資本論研究会で河上先生を知った、それ以来、先生の本を読んでいるが、とくに感銘を受けているのは平和の使途としての先生である。戦中、侵略戦争の敗北を見抜き、戦後の新しい平和な時代の到来を予見しておられる。今日的にいえば、先生は平和の問題を一貫して追究されていたといえる。私は平和運動に取り組んでいますが、先生の言動は励みとなります。今回は初参加ですが、これからも平和という問題を頭に置いて出席したいと思っています。

木村誠一氏　京都・堀川病院に勤めております。今日は、かねてから尊敬申し上げる先生やご高名な方がたの

元気なお声とお姿に接し大変、喜んでおります。大変、充実した一日です。私は高校時代、社研で『貧乏物語』をテキストに勉強、河上先生とご縁ができました、当時の先生が橋本・現中小企業同友家専務理事で、そのころから「危険思想」とやらに染まってしまったのです。その橋本先生、いまは中小企業の社長ですが、今春は吉村孫三郎さんの孫さん経営の下宮の料亭で同窓会をやったのですが、席上、河上会にいこうという話となった。来年は先生をお連れします。

私はこれまで日ソ、日中などの友好運動をやってきましたが、いま、亀山に伸びる第二外環状線建設計画がおきており、公害など問題がありますので、その実情を調べ取り組んでいます。

鈴木洵子氏　羽村の伯母の付き人として参りました。伯母が元気な間は一緒に出していただくつもりです。

編集後記

一九八八年も残り少なくなりました。昨年につづき本年も会報の季刊化が達せられました。これは会員皆さんのご協力であると感謝しております。来年もよろしく。

『やまぐち』という小雑誌が寿岳章子先生から事務局に恵贈されました。先生の「岩国へ（一）」が載っています。（第一八号、一〇月刊。発行所地方の季節、編集者東京都中野区本町四－八－六、鈴木篁二氏）。岩国出身の河上肇と宇野千代がとりあげられ、また音読会で河上の女性観を講演されたことも書かれています。このエッセイを拝読して編集子はところどころで先生の明解な語り口を聴いている気分になりました。

最新の『大原社会問題研究所雑誌』に二村一夫所長のコラム「七〇年ぼれ話」があります。二回目に「大原孫三郎と河上肇」（三六〇号、一一月刊）に、「孫三郎が研究所創立を決意した直接のきっかけは、河上肇『貧乏物語』にあったのではないか」と、その状況証拠が述べられています。二村所長ならではの興味深いコラムでした。

事務局では、会の財政を確立したいとの念願がいつも話題になっています。基盤は会費です。どうか年会費の納入にご協力下さい。

（細川　記）

西垣邦夫先生のご逝去をいたんで

木村和範

十月一六日の八八年総会への欠席のご連絡のおりに、本会会員、西垣邦夫先生のご逝去をお知らせしました。その後、事務局の紀平さんから、西垣先生はたびたび法然院を訪問され、お名前も記憶している、逝去の報に接し、残念でならない、ついては西垣先生の追悼文を投稿できないかという意味のおたよりを頂戴しました。

西垣邦夫先生は、北海道大学経済学部在学中、内海庫一郎先生の統計学ゼミナールに所属し、卒業後、大学院に進学され、引きつづき、内海先生のご指導をうけ、東欧の経済史を研究されました。西垣先生は、大学院在学中、札幌工業高校定時制の教師をして、生活費をまかなっておられましたが、「研究者よりも教育者として人生をまっとうしたい」との決心をされ、爾来、三〇数年の長きにわたって、文字どおり、定時制教師として人生をまっとうされました。西垣先生の、むしろ短いとも言うべき五十八歳の生涯は、定時制における平和教育に捧げられたと申し上げても、過言ではありません。

西垣先生のご葬儀には、全国にちらばる数え子の皆さんが参列されました。告別式で卒業生の方が読まれた弔辞のなかで、旭川東高校定時制時代のエピソードが披露されました。それは、あるとき、他の先生のように、どうして昼間、アルバイトをしないのかと、西垣先生に問うたとき、即座に、「日中アルバイトをして、疲れた体で君たちのまえには立てないから」と答えられたというものです。そして、日中は、毎日の授業にたいする周到な準備にあてられました。

西垣先生は、修学旅行にたいしましても、工夫され、かねてより私淑しておられた河上肇先生の眠る法然院に、たびたび生徒を引率され、平和に生きる権利の尊さを、実地に教育されました。西垣先生は、権力に抵抗し、生

涯を崇高な理念の実現に捧げられた河上先生を畏敬され、またみずからも、かくあるべしとの信念をもち、それを忠実に実践されて、その生涯を終えられました。内海庫一郎先生の北大時代の同窓会を「シグマ会」と申します。昨年のその会報の会員短信に、西垣先生は「新聞の論壇時評欄を見ていると、論を読まぬ小生にも、一九四〇年一〇月九日の日記に『言ふべくんば真実を語るべし』の偶成を記した河上さんの怒りが分かります。ナロードニキの中にあった贖罪の念を想うこの頃です。」と寄せられ、興亜・脱亜の亡霊の跳梁する現代社会を批判されました。なお、死の直前まで勤務しておられました小樽潮陵高校定時制生徒会誌『暁鐘』（八八年三月刊）に、西垣先生は、『精神のみずみずしさを失うことなかれ』と寄せられております。これが西垣先生の絶筆となりました。

虚飾をきらい、謙譲と質素をむねとした西垣先生は、シグマ会の数ある先輩のなかで、心に残していただいたことがひときわ多いものですから、追悼文投稿のご依頼にあまえさせていただきました。

河上肇記念会
会　則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。

二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。

四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。

五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。

世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。

六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。

会費は年額三〇〇〇円とする。

七、この会則の改廃は総会の議決による。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。
〒五四二　大阪市南区島ノ内一―一〇―一九
（丸善石油ビル）　千代田商事株式会社内
河上肇記念会

貧乏物語　初版

〒542
大阪市南区島ノ内一―一〇―一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五一―三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

●次号（53号）を以って終刊号の予定です●

京都（きょう）に"煙"あり

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（75～85才）が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時代戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A5版120頁　価格500円　〒200円

1965年創刊　只今52号作成中

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24
光玉方
電話　京都（075）802～2473番
振替　京都　2－15653番